



# 南山大学人類学博物館 MUSEUM notes

- ・日本の絵銭
- ・ユーミエン族の神画「十八神像」

VOL.5 2021.10

## 日本の絵銭

今回は貨幣コレクションの中から、日本の絵銭の一部をご紹介します。当館は、一九四九年に南山大学人類学民族学研究所の附属陳列室として始まりました。絵銭や貨幣はその頃に購入されたようですが、経緯についてはあまりはつきりと分かっていません。普段は展示室ではなく収蔵庫に保管しているの、目にする機会が少ない資料です。

絵銭は子供の玩具や信仰の対象として作られたもので、貨幣ではありません。いつ頃から作られ始めたかについては、鎌倉時代からという説や江戸時代前期の寛永十(一六三三)年に寛永通宝以外の諸銭が使用禁止となった頃という説など諸説あります。同じ絵銭でも大きさや絵が異なることが多く、完全に一致するものは珍しいです。

絵銭には、面子銭(めんこせん)、穴一銭(あないっせん)、浅間銭(あさません)、打印銭(だいんせん)、鏡屋銭(かがみやせん)、紋切銭(もんきりせん)、五位堂銭(ごいどうせん)、駒曳銭(こまびきせん)、念仏銭(ねんぶつせん)、題目銭(だいもくせん)、福神絵銭(ふくじんえせ)など様々な種類があります。編年的、機能的な部分の研究がまだまだ期待される資料です。



やかたせん  
屋形銭

径 23.78mm  
厚み 1.32mm  
重さ約 4g



はしがっせん  
橋合戦

径 23.23mm  
厚み 1.78mm  
重さ約 6g



わどう  
和同ますかぎ

径 24.95mm  
厚み 1.02mm  
重さ約 3g

### 【面子銭】

面子銭は遊び用具として作られた絵銭としては初期のもので、多くが肉厚に鑄造されています。面子遊びで打ち付ける際に、重い方が有利であるからでしょう。絵図としては、文字のみの和同開珎や中国の貨幣を模したもの、福神、駒など様々な種類があります。

### 【参考文献】

国立歴史民俗博物館編一九九八『歴史博フォーラム お金の不思議 貨幣の歴史学』

鈴木公雄 二〇〇二『銭の考古学』

赤坂一郎編 二〇〇六『日本の絵銭』

南山大学史料室編 二〇一一『南山学園史料集』南山大学の人類学』



ごほんぼねおうぎ  
五本骨扇

径 24.38mm  
厚み 1.97mm  
重さ約 7g



かめのじ  
亀ノ字

左 径 24.68mm  
厚み 4.34mm  
重さ約 14g  
右 径 24.45mm  
厚み 4.17mm  
重さ約 14g



みほのまつばら  
三保松原

径 24.82mm  
厚み 3.00mm  
重さ約 11g



ごさんきり  
五三桐

左 径 26.72mm  
厚み 2.51mm  
重さ約 10g  
右 径 23.16mm  
厚み 3.11mm  
重さ約 9g



たちばな  
橘

左 径 26.22mm  
厚み 2.85mm  
重さ約 11g  
中 径 24.67mm  
厚み 3.81mm  
重さ約 14g  
右 径 23.34mm  
厚み 3.62mm  
重さ約 11g



さんかりがね  
三雁金

径 25.15mm  
厚み 2.20mm  
重さ約 7g



ひだりともえ  
左巴

左 径 26.64mm  
厚み 4.40mm  
重さ約 18g  
右 径 26.68mm  
厚み 2.61mm  
重さ約 10g

【鏡屋銭】  
鏡屋銭は京都の鏡屋の職人が銅鏡を作った余りで鑄造し、鏡屋の店内で販売していたものと言われています。しかし、江戸時代の銅製鏡と銅質が少し異なるなど、全てがそうであったとは限りません。鏡職人が何らかの形で関わりながらも、鏡とは別に大量に作られるようになったと考えられます。鏡屋銭の絵は家紋が中心で、多くの種類が知られていますが、面子銭と同じく、面子遊びに使われていたとみられません。



ぼんじ  
梵字

径 25.36mm  
厚み 1.69mm  
重さ約 5g



だいもくせん  
題目銭

径 23.25mm  
厚み 1.30mm  
重さ約 4g



かな念仏

左 径 24.65mm  
厚み 1.34mm  
重さ約 4g  
右 径 23.68mm  
厚み 1.28mm  
重さ約 3g



念仏銭

径 23.94mm  
厚み 1.21mm  
重さ約 3g

【念仏銭題目銭】  
念仏銭は、浄土宗、浄土真宗の宗派が唱える念仏「南無阿彌陀仏」、題目銭は日蓮宗が唱える題目「南無妙法蓮華経」が書かれた文字のみの絵銭です。これらは江戸期の墓から見つかることも多く、お守りや六道銭（ろくどうせん）として使用されたことが分かります。また、大日如来に祈る際の呪文「阿毘羅吽欠（あびらうんけつ）」を梵字（ぼんじ）で書いたものもあります。

（南山大学人類学博物館  
学芸員 秦 優莉香）



ユーミエン族の神画  
「十八神像」  
じゅうはちしんぞう

普段は展示室の引き出しの中に展示されていて、見落としがちな「十八神像」という、タイのユーミエン族が使用する道教の神々が描かれた掛け軸を紹介します。図版は五、六ページに掲載しています。

ユーミエン族とは、中国華南地方からインドシナ半島に暮らす山岳民族です。ミエン語を話し、Mien(ミエン)もしくはIu Mien(ユーミン)と自称する人々です。中国では瑤(ヤオ)、タイ・ラオスでは Yao(ヤオ)、ベトナムでは Dao(ザオ)と呼称される集団に含まれます。出自は中国湖南省北部や洞庭湖付近だと考えられ、漢民族の南下により、タイには十九世紀後半に移住してきました。そのため、

漢民族との接触が長く、文化的な影響を色濃く受けているのが、「評皇券牒(ひょうこうけんちよう)」と「十八神像」です。「評皇券牒」については別の号で紹介します。

南山大学人類学博物館のユーミエン族の資料は、白鳥芳郎氏(当時上智大学教授)が团长として率いた「上智大学西北タイ歴史・文化調査団」が、一九六九〜一九七四年の間に三回実施した調査で収集したものです。調査後は、上智大学に保管されていましたが、上智大学に在籍する最後の調査団員となった量博満氏の退職を機に、二〇〇〇年に上智大学から南山大学人類学博物館に一括寄贈されました。寄贈された資料には、民族衣装や生活用具など二千点以上の現物資料のほか、調査時のカラー・スライドや八ミリフィルム、

儀礼に使用される文書の複写などが含まれています。

ユーミエン族は重要な儀礼の際に、十八枚の神画を祭壇の壁に掛けます(図一)。十八神像は神聖なものであるため、手を清めてからでないと触ることができません。十八神像を掛ける位置には決まりがあります。⑨玉清(ぎょくせい)(元始天尊)を中央に掛け、その左右に⑧太清(たいせい)(道德天尊)と⑩上清(じょうせい)(靈宝天尊)が配置されます。中央に配置される玉清・太清・上清の三柱の神は三清(さんせい)と呼ばれ、道教の最高神として崇拜されています。両側に配置される三清以外の神々は左右のどちらかを向くように描かれており、中央の三清を拜謁するように並べます。

①趙元帥(ちようげんすい)と⑦鄧大師(とうだいし)という

神画で、祭壇の守護を担う勇猛な武将神だと伝えられています。地上を統べる神 ③地府(ちふ)と天を統べる神 ⑤天府(てんぷ)、ユーミエンの祭司の祖 ④季天師(りてんし)と法の伝授者 ⑭帳天師(ちやうてんし)はそれぞれ対になるように配置されます。巻物状の⑮大度橋(たいとうきょう)は十七枚の掛け軸の上部に掲げられます。



図一:壁に掛けられている様子



十八神像のなかで物語性のある三点の神画、⑤拾殿(じゅうでん)、⑫壇(たん)、⑯大海幡(だいかいばん)に描かれている内容を紹介します。

⑤「拾殿(十殿)」では、中央に地獄の様子が描かれ、左右には地獄において亡者の罪業の処断を司る十人の王が描かれています。十人の王とは、秦広王(しんこうおう)、初江王(しょこうおう)、宋帝王(そうていおう)、五官王、閻魔王、変成王(へんじょうおう)、泰山王(たいざんおう)、平等王(びょうどうおう)、都市王(としおう)、五道転輪王(ごどうてんりんおう)をさします。

⑫「壇」には、七十以上の神々が九つの階層に分かれて描かれています。各階層の中央に、その階層における主たる神が置かれ、左右両側の神々は中央に拝謁する姿勢をとっています。最上段は左か

ら玉皇(ぎょくこう)、太清、中央に玉清、上清、聖主(せいしゅ)が描かれています。四層目の中央にいる三面六臂の神はユーミンエンの始祖にあたる盤護(ばんご※一)であるとされています。最下層には、象や虎に乗り刀を持つ武官が描かれています。

⑯「大海幡」神画には、ユーミンエン族に祭司の術を伝えた人物とされる大海幡と、その左下には人々が刀の梯子を登る様子が描かれています。これは祭司が受ける儀礼の様子を描いています。

最後に、神画の裏側も見てみましょう。玉清神画の裏面にのみ、この十八神像についての詳細が墨書されています(図二)。この十八神像は、家主の趙法財が光緒三三(一九〇七)年に絵師に依頼して描かせたものであり、某月の十二日に神画の開光儀礼が行われ

たことが書かれています。絵師は、広西省恩府武候県永寧郷大漁村に住む潘氏であり、神画を制作するにあたって、二十両六銭が支払われたことが分かります。

なお、玉清神画以外の神画の裏側には、神画の名称と所有者の名前が記されています。



玉清裏面



玉清裏面拡大

祖奉恭衣錦画彩請敬心誠議家丁興旺六畜成群庫滿金銀穀滿倉  
宗佑家堂人丁興旺六畜成群庫滿金銀穀滿倉  
法財趙金財合家諸議誠心敬請彩画錦衣恭奉祖  
宗保佑家堂人丁興旺六畜成群庫滿金銀穀滿倉  
錢財牛馬滿山莊更招外處  
田壕宅兒孫為宰上朝堂

皇上光緒三十三年歲次丙午■■■■画■■月  
十二日開光吉利榮華貴請廣西省恩府武候縣永  
寧郷大漁村潘■■画大小堂十張謝師紅銀貳拾兩  
六錢正匠保主人增福壽 福祿齊天子連孫

図二：玉清裏面写真と書き起こし

※一 盤護：ユーミンエンの始祖「盤護」は「評皇券牒」に登場するため、評皇券牒の号にて紹介する。

(南山大学人類学博物館

学芸員 井原 瑠梨)

南山大学人類学博物館

「museum notes」VOL.5

二〇二一年十月発行

編集・発行／南山大学人類学博物館



①趙元帥



②小海旛



③地府



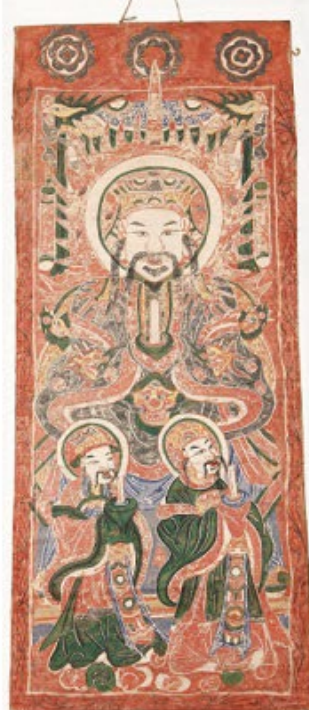
④李天師



⑤拾殿



⑥大尉



⑦聖主



⑧太清



⑨玉清



⑩上清



⑪玉皇



⑫壇



⑬靈皇



⑭帳天師



⑮天府



⑯大海旛



⑰鄧大師



⑱大度橋